

委託事業実施内容報告書

平成23年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 特定非営利活動団体 国際日本語コミュニケーション研究所

1. 事業の趣旨・目的

当研究所がオフィスを置く渋谷区は、数年前まで、外国人生活者に対する日本語支援の面で遅れていたが、平成21年度から区の企画部が日本語教室を開設して以来、最近では区内の公立小学校でも取り出し授業を増やしたり、放課後に日本語教室を始めるなど、活動が活発になってきている。

当研究所では、平成21年度から「渋谷区子ども日本語教室」の運営にかかわり、現在、当研究所の登録会員の中からボランティアを指導員を募り、小・中学生の指導を進めているほか、上記、小学校への日本語指導員の派遣などを行っている。悩みは、優秀な指導員確保である。指導員は有償ではあるが、若い指導員の中には条件のいい所があると、そちらへ移っていく人もいるので、当研究所としては、現在の需要を安定的に満たすとともに、将来の需要に応えていくためにも、まだまだ人材の発掘と育成が欠かせない。当研究所と同じような状況にある地域の日本語教育機関や団体も多いと思われる。

以上の背景の下、各地で有償・無償ボランティアとして子どもの日本語教育に当たっている人材の養成・発掘を図ることを目的として、ボランティアを対象とした実践的研修を実施した。

2. 運営委員会開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
2011年 7月8日 11:00～ 14:00	文化外国語 専門学校D 38講義室	石澤弘子 伊藤正子 黒川次郎 渡辺晋太郎	・研修参加者イメージ の共有化 ・研修目的の設定 ・学習項目の選択 ・担当講師の指名 ・周知方法 ・講義資料提出期限	・委員の自己紹介 ・司会、議事録署名人選出 ・文化庁提示の参加資格 の「ボランティア」イメージと 定義の共有化を図った ・前2回の助成活動より学 習日本語に寄った研修内 容とすることを決めた。 ・30時間という時間数の中 で与えるべき10の学習項 目を選択した。 ・カリキュラムの各科目を 担当する講師の人選を行

				った。
2011 年 11月26日 11:00～ 14:00	文化外国語 専門学校 D 38講義室	石澤弘子 伊藤正子 小林幸江 黒川次郎 渡辺晋太郎	・研修全体の評価 ・実施時期等の妥当性 ・研修科目、カリキュラムの流れ ・参加者のレディネス ・周知方法 ・24 年度提案についての予備的意見交換 ・第 3 回委員会開催の可否	・どの科目も新鮮で、参加者たちの今後の活動に役立つ筈。特に見学と実習が参加者から高い評価を得たことを確認した。 ・時期は良かったが、主婦には出難い時間帯だった。 ・活動中のボランティアが多かったので、出席率が悪かった。 ・必要なところにチラシ情報が届いていない可能性があった。 ・教科内容に沿った日本語指導の観点からのコース開設を研究してみる価値があるとの意見が出された。 ・第 3 回運営委員会は開催しないこととされた。

【写真】



第 1 回運営委員会 (7 月 8 日)



第 2 回運営委員会 (11 月 26 日)

3. 講座の内容について

- (1) 講座名 日本語ボランティアのための子どもの教育ブラッシュアップ研修
- (2) 開催場所

ア 講義：(学)文化学園文化外国語専門学校 D38 講義室

イ 実習： 渋谷文化総合センター大和田

(3) 学習目標

- ・言語的・文化的適応過程、母語喪失過程、心身の発達過程にある不安定な子どもたちの実態を知った上で、彼らに寄り添うことの大切さを理解してもらうこと。
- ・学習意欲を高めるための指導員たちのノウハウを学んでもらうこと。
- ・子どもたちが持つ現在の日本語能力と教科学習が求める日本語理解力の差を埋めるために行う日本語指導の現場の知恵を学んでもらうこと。
- ・子どもの理解力に合わせた、あるいは+1の発想に立った主教材の選び方、手作り教材・補助教材の作り方の多様性に目を向けてもらうこと。
- ・子どもとのコミュニケーションの本質は、愛情の交換であることを理解してもらうこと。

(4) 使用した教材・リソース

ア 講義用に作成した配付教材

- ・小林幸江「日本語教育と年少者教育(1)」
- ・同 上 「日本語教育と年少者教育(2)」
- ・渡辺晋太郎「子どもの日本語教育と指導の留意点」
- ・手柴スエ子「日本語指導の実際—1 『実際の子どもグループの特性に合った指導計画の作成と指導』」
- ・渡辺晋太郎「日本語指導の実際—2 『中学生の教科指導』」
- ・伊藤正子「日本語指導の実際—3 『実習に向けた教案作成』」
- ・石澤弘子「日本語指導の実際—4 『教授法の基本とトレーニング・効果的な練習法』」

イ 市販教材

- ・横田淳子、小林幸江「マリアとケンのいっしょに にほんご」 スリーエーネットワーク
- ・榎本牧、屋代瑛子、遠藤宏子「ひろこさんのたのしいにほんご 1」 凡人社
- ・文部科学省『にほんごを まなぼう 1』(2009.1) ぎょうせい
- ・ひらがなれんしゅうちょう

ウ 参考文献

- ・横田淳子、小林幸江、鈴木孝恵『外国人児童生徒に対する初期日本語教育の文型』 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 25号
- ・小林幸江、横田淳子、鈴木孝恵『外国人児童生徒に対する初期日本語教育の語彙調査』 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 25号
- ・小林幸江、鈴木孝恵『外国人児童向け日本語教科書の文型』 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 26号
- ・横田淳子、小林幸江「外国人児童の教科学習のための日本語指導項目調査」 『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

- ・斎藤ひろみ編著『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』(2011) 凡人社
- ・国際交流基金『日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』
- ・同上『日本語教授法シリーズ9 初級を教える』
- ・(特非)国際日本語コミュニケーション研究所『外国人の子どもたちの学習支援を考
える市民フォーラム記録集』(2010.7)

ウ 手作り補助教材

- ・日本語学習用絵カード(手柴スエ子)
- ・中学社会(公民)語彙リスト(渡辺晋太郎)
- ・教案フォーマット

(5) 受講者の募集方法

- ・チラシの配布 A4 版 700 枚
- ・ポスター掲出 A3 版 80 枚
- ・首都圏各地の国際協力協会への協力依頼
- ・国際日本語コミュニケーション研究所(WJCI)ホームページ掲載
- ・WJCI 会委員への口コミ PR の依頼
- ・(学)文化学園への学園内ポスター掲出依頼

※チラシ別紙

(6) 受講者の総数 11人

(出身・国籍別内訳 日本 10 人, 韓国 1 人)

(7) 開催時間数(回数) 30 時間 (全 10 回)

講義 3時間 (8回)、実習/見学 各3時間 (2回)

(8) 参加対象者の要件

- ・国籍、年齢、性別不問
- ・2 年程度の経験を有し、現在も地域の日本語ボランティアとして活動している者

(9) 講座内容

回	開催日時	時間 数	受講 者数	講座名／学習内容	講師
①	10月1日 9:30～12:30	3時間	10人	移行期の日本語指導1／ 初期指導の目標、教材研 究、指導の進め方	東京外国語大学教授 小林 幸江
②	10月5日 17:00～20:00	3時間	4人	*見学1回目／渋谷区子ど も日本語教室の見学	国際日本語コミュニ ケーション研究所 理事 渡辺 瑠美
	10月7日 17:00～20:00	3時間	5人	*見学2回目／渋谷区子ど も日本語教室の見学	国際日本語コミュニ ケーション研究所 理事 渡辺 瑠美

③	10月8日 9:30～12:30	3時間	9人	移行期の日本語指導2/ 移行期の指導目標と教材 研究、指導の進め方	東京外国語大学教授 小林 幸江
④	10月15日 9:30～12:30	3時間	8人	子どもの日本語教育と指 導の留意点／子どもの日 本語教育の背景・渋谷区 子ども日本語教室の実践 例・指導員たちの悩み・運 営管理者が期待する日本 語教師像	国際日本語コミュニ ケーション研究所副 理事長 渡辺晋太郎
⑤	10月22日 9:30～12:30	3時間	6人	日本語指導の実際1～実 際の子どもグループの特 性に合った指導計画の作 成と指導～	国際日本語コミュニ ケーション研究所登 録指導員 手柴 スエ子
⑥	10月29日 9:30～12:30	3時間	5人	日本語指導の実際 2～中 学生の日本語指導～／渋 谷区日本語教室の中3生 徒たち・進路指導・教案と 指導教材の実際・高校入 試作文の指導例	国際日本語コミュニ ケーション研究所副 理事長 渡辺晋太郎
⑦	11月5日 9:30～12:30	3時間	7人	日本語指導の実際3／教 案とは何か(授業計画をた てるために・授業の流れと 用語の確認・教材・教具)、 教案の作成演習、発表と 意見交換	国際日本語コミュニ ケーション研究所登 録指導員 伊藤 正子
⑧	11月12日 9:30～12:30	3時間	7人	日本語指導の実際4～教 授法の基本とトレーニング ・効果的な練習法／導 入の仕方・基本練習の仕 方・応用練習の仕方・研修 の評価	目白大学大学院教授 石澤 弘子
⑨	11月16日 17:00～20:00	3時間	3人	**実習1班／渋谷区子ど も日本語教室の子どもた ちのグループのいずれか を選んでの授業実習	国際日本語コミュニ ケーション研究所登 録指導員 手柴スエ 子

	11月16日 17:00～20:00	3時間	3人	**実習2班／渋谷区子ども日本語教室の子どもたちのグループのいずれかを選んでの授業実習	国際日本語コミュニケーション研究所登録指導員 小林 孝雄
	11月18日 17:00～20:00	3時間	0人	**実習2回目／渋谷区子ども日本語教室の子どもたちのグループのいずれかを選んでの授業実習	
⑩	11月26日 09:30～12:30	3時間	3人	評価とレポート作成	国際日本語コミュニケーション研究所副理事長 渡辺晋太郎

注. *及び**は、各2回のうち、いずれか1回に参加することが求められた。

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

・受講生の満足度

ア. 全体評価としては、出席率が8割に達しなかった者も含め、9割の参加者が満足、かつ今後のボランティア活動に活かせると回答した。特に、上表②「見学」は、『目から鱗』であったし、⑨「実習」では、「指導のポイントがよく分かった、この研修会に参加して良かった」という声が殆どであった。

イ. 科目別では、上表⑤「日本語指導の実際1～実際の子どもグループの特性に合った指導計画の作成と指導～」⑥「日本語指導の実際2～中学生の日本語指導～」⑧「日本語指導の実際4～教授法の基本とトレーニング・効果的な練習法」の3科目について、出席者全員が非常に満足、かつ今後の日本語教育活動に活かせると評価した。

ウ. 運営については、時間配分については7割が良かったと評価したが、時間帯については、「あと30分～1時間程度遅らせてもらった方が良かった。9時30分スタートは、主婦にとっては出難い」との声が多かった。

② 実施主体からの研修内容結果評価

ア. 目標の達成状況

前期3(3)に挙げた学習目標は、十分に達成されたと評価する。特に、年少者の日本語教育の中心は、コミュニケーション能力の付与ではなく、学習日本語をつけること、学習日本語の中心は読解力と思考力を強化すること、日本語の「こそあど」のセットは、どの母語にも備わっているものではないこと、高校への推薦入試では作文・小論文作成能力が決定的に重視されることなど、参考書や文献ではなかなか分からない点を十分に理解してもらえたと評価している。

イ. カリキュラムと指導体制

参加者のほとんど全員が現在、ボランティア指導員として地域の日本語指導にかか

わっている人たちだけに、学習時間をこれ以上長く取ることはできないことが経験上分かっていた。30 時間という時間数でのカリキュラムとしては、完成度の非常に高いカリキュラムだったと考える。また、指導体制も、これまで3年にわたる「渋谷区子ども日本語教室」の指導に当たってきた豊富な人材に支えられていたので、見学・実習ではほとんど個人指導のような肌理細かさで参加者のガイドができた。また、講義科目でも、各分野の第一線でご活躍中の専門家の協力をいただくことができて、参加者の満足度の高い研修を実施することができた。

ウ. 参加者の募集活動

前回に比べ、参加者数は 2/3 程度と落ち込んだ。日本語学校でも仕事をしているある参加者は、「今回の研修プログラムの案内が学校には来ていなかった。日本語学校にも非常勤講師の中には地域でボランティア活動をしている人もいるのだから、情報が届くように配慮して欲しい」とお叱りを受けた。確かに、昨年度は、ある日本語関係の出版社さんが全国の日本語教育機関に周知用パンフを送付する際に、私どものチラシを同封させていただくという協力をしていただいた。今回は、タイミングが合わず、それができなかった。今回の最大の反省点である。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

ア. 日常の活動計画

- ・渋谷区子ども日本語教室の一層の充実をはかること
- ・渋谷区内公立小学校への日本語・教科学習指導員の派遣
- ・渋谷区の内中高一貫校が実現すれば、そこへの日本語・教科学習指導員の派遣
- ・教科学習に直結する日本語指導ができる人材の養成

イ. 中期活動計画

- ・教科学習のための日本語教材の作成

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

当研究所では、今回の文化庁助成事業も、各地でボランティアとして活動している人たちのレベルアップを願って実施したものであるが、同時に私どもの子どもの日本語支援活動に参加していただける方の発掘を期待して実施したものであった。そんなことから、募集段階で多くの国際交流協会の協力をお願いした。その結果、例えば横浜市青葉区の国際交流協会からは、会の中心として活躍中の 4 人の指導員に参加いただくことができた。

また、この研修会の目玉は、見学と実習にあったが、その見学・実習の場として、「渋谷区子ども日本語教室」を活用させていただいただけでなく、非番の指導員たちの全面協力をいただいた。

② 研修後の人材活用

参加者中、全講座・実習・見学に参加された 1 名が、当研究所の会員として参加し、現

在渋谷区立臨川小学校への派遣指導員としてご活躍いただいている。また、前述、青葉区国際交流協会から参加された方は、中学生の日本語指導員として日々活躍されている。更に、日本語学校の非常勤講師として採用された方もいらっしゃる。いずれにせよ、文化庁の助成事業に参加し、子どもの日本語教育の発展に当研究所も微力ながら貢献出来ていることを実感するとともに、これからの外国人児童生徒の教育支援の発展への責任の重さを感じている。

(12) 今後の課題

一口に外国人児童・生徒といっても、年齢、来日時期、日本での所属学校(アメリカン・スクールあるいはインターナショナル校なのか、それとも公立校なのか)等によって、特性が大きく異なる。たとえばアメリカン・スクールやインターナショナル校からの子どもの日本語教育は第2言語教育ではないから、公立校の子どもが同じカリキュラム、同じ教科書で学ばせるのは無理である。内容面ばかりではない。前者の子どもたちは、出席率も悪く、意欲も弱い。他方、公立校の場合、小学校1・2年生では勉強する習慣がなく、10分とじっとしてられない子どももいる。日本語指導より生活指導の方が大変だ。中学生では、学校の部活や行事に多くの時間を取られて、日本語教室には遅くやって来る子どもが多い。とはいえ、公立校の子どもたちに共通している点は、学校のテストでいい点を取ったときは遅刻率も欠席率も下がる傾向がかなりはっきりしていることである。

他方、中3生徒は高校入試が最大の関心事である。推薦入学を希望する者が多いが、そこでは作文・小論文の壁が立ちほだかる。特に、子どもたちに人気の高い高校では、「温暖化」や「インターネット社会の弊害」を扱ったような社会性の高いテーマが出題される傾向になってきており、来日1～2年の子どもを合格水準まで高めるのは至難の業である。とはいえ、指導員たちは、子どもに寄り添い、子どもの将来の夢の実現に力を貸したいと願っている。

これまでの日本語教育は言語的側面にフォーカスして教授法、教材の開発が行われてきたし、それらは非常に完成度の高いレベルに来ていると思われる。今後は、内容理解と発信力の強化を目標にした日本語教育が求められるだろう。当研究所の活動も、言葉中心の日本語指導から、教科内容中心の日本語指導を目指した教材開発にエネルギーを割いていきたいと考えている。

